
僕が望む全て

桜真理恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕が望む全て

【Nコード】

N7554X

【作者名】

桜真理恵

【あらすじ】

公爵家の長男・コーネリアスには、恋してやまない許嫁・セシリアと結婚できない理由があった。全7章の予定です。近世イギリスを舞台にした、ファンタジー設定を含む恋愛小説です。

改行少なめ、文字多めです。気をつけてはおりますが、携帯からは読みにくいかも知れません。

1 (前書き)

近世のイギリスを舞台にしています。
妙なところがありましたら申し訳ありません。><。

彼女はおよそ『淑女』とは言えない少女だったと思ひ出す。……
少なくとも、自分の前では。

屋敷の南側にある自分の居間の大きな窓。今も屋敷内に住む乳母が見たら、自分が教えていたことは無駄だったのかと嘆かれること請け合いの格好で窓枠に座る。開け放たれた大きな窓、その窓枠に腰掛け、脚を組む。銀色に煌めく黄金色の美しい瞳を、何処を見るわけでもなく、遠い空気に向けている。結ばずにおいた漆黒の髪を、暖かな風が優しく絡め取るうとしていく。

頬を撫でる緩やかな空気。……ここに吹く風は何故ロンドンと似ても似つかないのだろう。

久しぶりに領地に舞い戻り、『彼女』はすれ違いにロンドンへ行っていると言われ、今度はそちらに意識が流れてゆく。同じ空気、同じ風。なのに、行く先々で違ったものに感じるのは、気候の所為だけではない気がする。

そういえばセシリアが言っていた、何処に行こうとも、自分が幸せだと思える時間を過ごした場所にいちばん素敵な風が吹く、とそれはきつと、この屋敷のことだ……。彼は結論づけた。もしくは……。

ふわりと風が甘い薫りを運んでくる。花の香りだろうか。……何という名の花だろう。彼女が居れば教えてもらえるのだが。

そこで気付く。続けて苦い笑みが口元に浮かぶ。ロンドンでは浮き名を流す自分が、身の周りで起こることを思う時、全て彼女に帰結するのはどうしたことか。手を髪にやり、すつとかき上げる。柔らかい眼差しで、彼女の屋敷の方角をなんとは無しに眺めた。

折角帰ってきたのに、ここに居ないなんて。ロンドンに居るのなら、知らせてくれれば、彼女の用が済むのを待って、一緒に帰って

来ただろうに。何の為に、馬を何度も変えて、休みも取らずに帰ってきたのか……。

そこでまた新しい事実気付く。そうか、僕は彼女に逢えると思つて、あんなに急いで帰ってきたのだ。また笑みが浮かんだが、今度の笑みは優しかった。しかし、その瞳は暗い憂いを宿している。

「仕方のない奴だな、コーネリアス・バートランド。」
自分で叱咤してみる。

今度の帰宅は、そのセシリアとの婚約を破棄する為なのに。婚約といつてもお披露目もしていないし、本人同士にその気がないと納得させれば解消できるだろう。ただ……自分以外の全員が二人の結婚を期待しているだけだ。

自分以外の全員。

自分「以外」だと？

コーネリアスは苦笑を漏らした。

コーネリアス・バートランドは、シアリーズ公爵家の長男である。シアリーズ公爵家は何代か遡れば王弟にたどり着くという由緒正しい公爵家であり、祖父にあたる先代の公爵が起こした事業も、小さいながらも成功している。

祖父から父へと引き継がれた事業は、現在ではコーネリアスが動かしている。今のところ、成功していると自負しているが、父もそれを認めてくれているのかも知れない。コーネリアスが育った屋敷とは別の場所に、継母と共に新しい居を構えて何年にもなる父が、お前もそろそろ身を固めると煩く言ってくる。今までは、学業や仕事に忙しいからと先延ばしにいられた。

ところが、この冬に父が倒れ、容態は芳しくないと継母のレイチエルが言つてよこした。

「少しでも早く結婚してくれないかしら、コーネリアス。死ぬ前に孫の顔が見たいと仰るのよ。」

先月、見舞いに行ったら、とうとう最終宣告とも言える台詞を聞

かされた。勿論その言葉は、セシリアとの結婚を示していたのだらう。

レイチエルと父が再婚したのは彼が13になる年だった。もう10年も前の話だ。実の母はさる貴族の令嬢だったが、駆け落ち同然で父の元に嫁いで来た為、家族とは疎遠になっていたと聞いている。その母は彼が幼い頃に病で亡くなってしまった。

自分の生母のことを知らなければ、と思う前にも、不思議に思ったことはあった。公爵家に嫁ぐのに何故駆け落ちなのか、と。

傲慢な言い方ではあるが、爵位があると言うだけで魅力を感じる人間は多い。そして称号を鼻にかけるような輩も数多い。大抵の親は喜んで娘を嫁がせてくるものだ。

……それが何故？ 答えは簡単だ、どちらかの家族が反対した為だらう。

ではどちらの家族なのか？ その答えは分からない。或いは両方かも知れない。しかしコーネリアスの父が束ねるシアリーズ公爵家に関して言うならば、数え切れない親戚たちは欲深な人間が多い。とは言っても、シアリーズ公爵はその最高位にある。親戚たちの反対など、簡単に押し切れる筈である。

父の母であるコーネリアスの祖母は傲慢ではあるが人格者だ。更に彼女はロマンスを深く信仰している。祖母自身が、祖父に一目惚れされるといふ壮大なロマンスを経験している。父がこの人だと言ったなら、例えそれが何の身分もない、例えば粉屋の娘でも、喜んで受け入れるのではないだらうか。

シアリーズ公爵家は地所からの収益や、事業のおかげで財産に困っているわけでもなく、嫁いでくる女性の持参金はあてにせず済む。加えて祖母は社交界での地位や評判などはあまり気にしない、変わり者だと言われる類の女性だった。ということは、生母の家族が反対していたことになる。

後に、彼が母について尋ねて回った時、皆が口を揃えて言うことは、如何に両親が愛し合っていたかということや、如何に素晴らし

い女性だったかということ、母方の家族については誰も知らなかった。……口を閉ざしているのか、本当に知らないのか……。

彼はそれ以上、誰にも訊かなかった。レイチエルの手前もあつたし、知るのが怖いというのもあつた。コーネリアスは今でも生母については多くを知らず、生母の出身に関しては全く知らないままであつた。

母を亡くした後、妻を溺愛していた父の嘆き様は凄まじく、何年も再婚の勧めを断つてばかりいた。跡を継ぐべき息子が一人しか居ないのはシアリーズ公爵家全体の問題だと、親戚が一様に抗議したが、一人居れば充分だと父はすげなく言つてかえしたと語り草になつている。夫婦の両方に愛人が居るのが当たり前だと言われる当世にあつて、父のそんな態度は珍しく、領地に住む人々にはとても好意的に写つたらしい。

それはそうだろう、とコーネリアスは思っている。誰だつて自分たちが納めている税を愛人に注ぎ込むような領主など、お断りなのだから。

父がレイチエルと再婚したいきさつには、息子であるコーネリアスも多大に関わつていた。レイチエルは素晴らしい女性だった。父を心から愛してくれる。

少々荒療治ではあつたが、コーネリアス少年は祖母、レディ・イザベラを巻き込んで策を弄し、更には領地内の人々の手を借りて、それを成功させたのだつた。そのお影とは言わないが、父も素晴らしく幸せに暮らしている。

……冬に倒れるまでは。

あんなに幸せそうにしていたレイチエルも、青い顔をしていた。

彼が見舞いに行くと、ずっと実の息子のように接してくれていたレイチエルも多少は色を戻したが、不安を口にするうちに、頭に血が上つたらしく、赤い顔をして、彼に断つて席を立つてしまった。こ

れはいよいよ困ったことになったらしい。コーネリアスは実は、途方に暮れていたのだった。

自分の心に、僅かに残った夢を、この手で握りつぶさなければならぬ。

そしてその瞬間はもう、先延ばしには出来ないらしい……。

1 (後書き)

長いお話の幕開けです。

書き溜めはあるのですが、更新はゆっくりになると思います。

セシーリアは領地の境界を接する、名だたる名家、フェザーランド家の一人娘である。コーネリアスとセシーリアの父親同士は幼なじみであり、無二の親友であった。

フェザーランド夫妻には、ボームント家のような壮大なロマンスは訪れなかったが、夫婦仲は良く、フェザーランド卿は気弱な妻を気遣ってか、夫人への愛のためか、愛人も居ないという話である。また、フェザーランド家の女主人は病気がちで、触れれば折れてしまいそうな雰囲気のある夫人である。セシーリアを授かったのも奇跡だと言われた程であり、フェザーランド家には後を継ぐべき子どもがセシーリアしかいない。

長年、親しく行き来していた二つの家で、一人息子と一人娘の将来を期待するのは自然なことなのかも知れない。幼い頃から、ことあるごとに「セシーリアを大事にするんだぞ」とか「娘を幸せにしてやってくれ」とか、振り返れば二人の結婚を前提としているような言葉をかけられていた。

爽やかな風を浴び、窓辺に座ったまま居間を振り返ると、壁にくつつかの小さな肖像画がかかっているのが目に入る。その中の一枚の肖像を眺める。その絵はとても精巧に描かれていた。昔ながらのイギリスの花がごとく、金糸の様なブロンド。薔薇色に染まった、透き通るような白い肌。5〜6歳の頃のセシーリアが、きらきらとこちらに微笑みかけていた。

コーネリアスは、彼女の髪が、日に透けると赤味を加えたようなストロベリーブロンド、月光の下では月明かりをそのまま髪にしたようなプラチナブロンドに見えることを知っていた。

そしてセシーリアは不思議な瞳の色の持ち主だった。

コーネリアスは彼女と初めて言葉を交わした時のことを思い返し

ていた。

そう、彼女はとてもお転婆で、弾けるように笑う、陽光の塊のような少女だった。

最初に彼女に逢ったのは彼女が生まれて間もない時だったらしい。ということは、コーネリアスは6歳になる直前だと思われる。しかし彼自身はそのことを覚えていない。フェザースランド卿は父の無二の親友だったし、父にとって何の気兼ねも要らない数少ない友人の一人であり、妻を亡くした悲しみに浸っていた父を心配してよく訪ねてくれた恩人だった。

自然、フェザースランド夫人もよく伴われており、彼らが家にいることは多かったのである。が、フェザースランド夫人は出産後、滅多に外出しなくなった。もとより家の中で静かに過ごすのが好きな彼女は、娘と共に留守の番をする方を好んだ。

それによつて、コーネリアスが未来の妻と期待されている少女と、それと知らずに出逢ったのは、父に伴われて産後のお祝いに行った時が初め、そしてフェザースランド卿が流行病で寝込んでしまった見舞いに行った時が二度目だった。

コーネリアスはフェザースランド卿をとて慕っていて、どうしても部屋まで見舞うと言つて聞かなかったが、流行病は感染するからと、寝室に入れてもらえなかった。そこでふてくされて庭の散策に出かけたコーネリアスは、庭のはずれで声もなく泣き崩れている少女を見つけた。

大きな樹が密集した庭のはずれ。小さな少女が、消えてしまおうというように小さく、丸く蹲っていた。

それまでも、コーネリアスには沢山の友人が居たし、小さな女の子も沢山知っていた。

けれど彼は泣きじゃくっている女の子の扱い方など知らなかった。見なかったことにして屋敷の反対側の庭に行こうかとも思ったが、

どうしてもその場を動けず、少女を見守っていた。

僕よりかなり年下の様だ。小さな女の子を相手に、何故石のように固まってるんだ？

そう思ったが、声を殺して肩を振るわせる、そのあまりに哀しい泣き方に近寄ることはおろか、声をかけることも出来ないでいた。

一頻り涙をこぼし、彼の見守る前で涙を拭った彼女は、ゆっくりと振り向いた。

コーネリアスは息が止まるかと思った。少女の瞳は新しい涙が溜まり、影を作った大きな樹を背にして、その瞳だけが細かく揺れる輝きを放っている。目の前に居るのはまだ小さな少女なのに、彼はこれほど美しい光景を見たことがないと思った。

「だあれ？」

まだしゃくりあげながら、驚きもせず少女が訪ねる。そこで初めてコーネリアスは動けるようになった。黙って彼女の側まで歩いていき、その小さな手を取り、それまで木陰で隠れるようにしていた少女を、陽の光の中に連れ出す。

そのまま木陰においておくと、闇に捕らわれて連れ去られてしまふのではないかと恐怖に似た思いが胸をよぎったのだ。

夏の日光のもとで、そのカールしたストロベリーブロンドがきらきらと輝く。その輝きに目を奪われながら、俯いている少女に声をかけた。

「君はだれ？ここはフェザーランド卿のお庭だよ。……何故泣いているの？」

コーネリアスの口から飛び出す早口の質問に、少女は俯いたまま、しばらく何も言わなかった。

怖がっているのかと思ったが、俯いた少女の後頭部に心配げな眼差しを投げかけているうちに、彼女が涙を押し戻そうと苦戦しているのだと気付いた。呼吸さえ押し殺している様だ。自分の身の、胸にさえ届かない小さな身体を震わせながら必死に俯く少女に、何故だか胸が痛んだ。無力な自分にできることを懸命に探したが、見知

らぬ少女相手に、どうして良いのか、皆目見当がつかない。

少女の小さな手を捉えていた自分の両手を、彼女の頭と背にやる。腹のあたりが濡れていくのを感じる。そのまま軽く抱きしめてその震えが去るのを待った。時折背中をさすり、頭を撫でた。今思えば、自分が知っていた唯一の慰め方だったのだと思う。母を思って泣いた夜に乳母や父が、同じやり方で慰めてくれたことを思い出したのは、そのずっと後だった。

2 (後書き)

増やしたつもりなのですが、まだ改行が少ないでしょうか……・

3 (前書き)

小さなセシリアとの思い出は続きます。

しばらくそのまま居ると、肩を大きく震わせた少女が、絞り出すようにつぶやいた。息と嗚咽の合間に少しづつ言葉らしきものが発せられる。

『とうさまが死んじゃったらどうしよう』。とぎれとぎれの言葉をつなげると、彼女が言ったのはそういうことらしい。

よく訪ねてくるフェザーランド卿が、可愛くて仕方のない愛娘の話を頻繁にするのでコーネリアスは『セシーリア』の名前を知っていた。ではこの少女がフェザーランド卿の令嬢なのか。

蹲って泣いていた少女は、聞いていた年齢よりも幼く見えた。新しい目で少女の髪を見下ろす。

そういえば、フェザーランド卿はブロンドだったっけ……。

本人の嘆きを無視して後退してしまっている髪は、確かに薄い金色だった。コーネリアスと同じ漆黒の髪をふさふささせている父に、フェザーランド卿はよく自分の広すぎる額をネタに笑っていた。これでも昔は美男子で通っていたのになあ、と。君の父上と僕は、ご婦人方にとても評判が良かったんだよ、コーネリアス。そうは見えないかも知れないけれどね。

彼はとても陽気な話し相手だった。

セシーリアにとれば最愛の父。不安で仕方がないのも無理の無からぬことだろう。フェザーランド夫人はその体の弱さ故、他の誰よりも、流行病から離しておかなければならない、と、フェザーランド卿の意向で、コーネリアスの祖母、イザベラの屋敷に滞在している。セシーリアは母と共に祖母の屋敷に行ったと聞いていたのに。

「きつと大丈夫だよ。」

コーネリアスは優しく声をかけた。フェザーランド家の屋敷では使用人が落ち着きをなくし、父でさえ青い顔をしていたのを、彼は言わずにおいた。気休めだとは思ったが、それでも彼女を泣かせて

おいて、その場に佇んでいたくはなかった。……なんとしても。

そのまま兄のように抱きしめてみると、少女の肩が次第に落ちてきてきた。コーネリアスは同時に自分の心も落ち着いていくのを感じていた。少女がやっと話出す頃には、安堵に近い気持ちになっていた。

掠れた鼻声で少女は言った。顔をコーネリアスの服に埋めたまま、やはりところどころでつつかえながら。

「あたし、セシーリア。」

コーネリアスは、知っている、と言いかけて止めた。代わりに言ってみる。

「まつげ（シリア）？」

案の定少女は怒って言った。

「セシーリア！」

「よろしく、まつげちゃん（ミス・シリア）。」

嘆きが怒りに代わっただけで、彼は高揚した気持ちになっていた。

「セシーリアだってば!!!」

怒った彼女はぱっと顔を上げた。

目が合う。

その瞳とぶつかって、言い返そうとしていた言葉を忘れた。

視界いっぱい彼女の目が見えているような気がしていた。頭の中は真っ白で、その両目しか見えない。僕は誰で彼女は誰なのか……?

自分の心臓を射抜かれた気さえた。

グリーンとブルーの瞳。

木陰で見たときはブルーだと思った。けれど陽の光で間近に見ると、それは左右違う色の瞳だった。驚嘆する。……心臓が肋骨を突き破るくらいに。……そうだ、これは驚嘆だ。そうに決まってる。

目をそらすことが出来なくなった。コーネリアスから向かって左側の瞳は砕けたガラスのような深い勿忘草の色。いや、ブルーのダイヤモンドかも知れない。僕は見たことないけど。

右側の目は形容しがたく美しいブルーグリーンの瞳だった。空の色でもなく、木の葉の色でもなく……この色は何て言うんだろう……？ レイチエルがいつも付けているエメラルドより、柔らかく、そして青い。

そこまで考えたが、彼女にからかいの言葉を返した。

「わかってるよ、まつげちゃん。」

幸いなことに、かなり経っていると思った驚愕の時間は、彼女が瞬きする一瞬だけだったらしい。頬を染めて、彼女は切り返した。

「あなたってとびきりイヤなひとね!!」

良かった、彼女は激怒しているらしい。その不思議に美しい瞳に、悲しみの断片が残っていないことを確かめながら、コーネリアスは言った。

「コーネリアスだよ。」

彼女はきらきら光る瞳をコーネリアスに向けたまま、ぼんやりと言った。彼女の思考が、父親に戻っていくのが分かった。

「こんにちは、コニー。」

霞がかかったような瞳に涙が戻るのを恐れて、コーネリアスは慌てて言った。

「コーネリアスって呼んでよ。」

少女がきょとんとしてコーネリアスを見上げる。その目に自分が映っていることに、妙な満足感を覚えた。

「なぜコニーじゃだめなの？」

別に駄目じゃない。不思議そうに見つめられて、更に慌てて言葉を探す。乳母や庭師たちはいつも僕を『コニー坊ちゃん』と呼ぶ。

……でも駄目なことになきゃ。

ふん、と鼻を鳴らしてから、鼻にしわを寄せた。

「『コニー』じゃまるで赤ちゃんだろ？」

一瞬間をおいて、セシーリアが弾けるように笑った。音が弾んでいるように聞こえた。……きらきらと。笑っている。今度こそコー

ネリアスは心からほっとした。自分の顔が幸せそうに微笑んでいることには気付いていなかった。

彼女が笑い終える前に、彼は声をかけた。

「君の瞳って、片方ずつ違うんだね。」

その問いかけに彼女は誇らしげに応えた。

「そうよ、『オッド・アイ』っていうの。……かあさまが教えてくれたのよ。」

コーネリアスを通り越して屋敷を見た少女は、微笑みを消して言った。

「とうさまが、とても珍しい、素敵な瞳だつて。」

コーネリアスは舌をかみ切りたくなつた。

外見の話なんて、両親に繋がるに決まってるじゃないか！

「『奇妙な目』?」

瞳に無邪気さをみなぎらせ、るように努力して、からかい続けることにしたコーネリアスは言った。『odd』^{オッド}という単語の意味のひとつは『奇妙な』。明らかに気分を害したらしい小さな女の子は肩を怒らせて言った。

「『片方の目』よ!」

勿論『片方の』という意味もある。彼の腕から逃れて、続ける。

「もおっ!あなたさつきから、わざとあたしをからかっているの?!」

怒りが冷めなさそうなのに少し安心して、彼は軽く言い返した。

「ごめん、まつげちゃん。初めて見たものだから。」

涼しい顔で言つてのける。セシーリアは美しい髪を逆立てそんな勢いで怒っていた。

「さよなら、ミスター・コーニー!!!」

言い残してぷりぷりしながら屋敷の方に向かっていく。彼女が、暫くは涙を浮かべたりしないであろうことが嬉しくて、コーネリアスは笑った。……腹の底から。

笑い声が耳に届いたらしいセシーリアは、ちらりとコーネリアスを一瞥し、

「レディに向かつて失礼しちゃっわー!!」
とぶつぶつ言いながら、屋敷に戻っていった。およそレディらしからぬ足取りで。

それが彼女と最初に言葉を交わした時のこと。

3 (後書き)

とりあえず、今日の更新はここまでです。
あと1話分で第1章が終了する予定です。

……「ミスター・コニー」。

思い出しても頬がほころぶ。

彼女が屋敷に入って、姿が見えなくなっただけから、コーネリアスの心は弾んでいた。泣いていた小さな淑女を笑わせたことが嬉しくて。……正しくは『怒らせた』のだが、泣きやませたことに変わりはない。

あれから12年経った。

あの時、11歳だった無邪気な少年は、その後……。

いや、考えるのはよそう。

泣いていたセシリアに出逢った日から、フェザーランド卿の容態は、ベッドから出られないまでも、だんだん落ちついていった。コーネリアスは毎日のように父と見舞いに行き、当然、セシリアにも頻繁に逢った。

フェザーランド卿によつて最初に紹介された時には、まだ敵意がむき出しだった小さなセシリアは、次第にコーネリアスを仲間と認めたようだった。

仲間だと認めて貰うまでに、コーネリアスが彼女に捧げたいたずらの数々は常に、気の毒な虫やカエルによる安全地帯への避難と、彼らに対するセシリアの悲鳴で締めくくられていた。セシリアは動物が大好きだったが、虫と爬虫類は、その範疇外だということをコーネリアスは知っていた。

コーネリアスの誤算は、小さな女の子が、必ず仕返しを編み出さずにはいられないという習性を持ち合わせていたことだった。コーネリアスのベッドの真ん中に、黄色い花びらを絞った水で大きな染みを作ったり、コーネリアスのお気に入りクッションを飼い犬に差し入れたり、来客に挨拶するコーネリアスの髪に、こっそりリボ

ンを飾ったり。多くの場合、セシーリアの仕返しは大成功を納めた。

しばらく互いにいたずら合戦を繰り返していたが、ある日、二人は一緒に何か大きないたずらを仕掛ける方が面白そうだということに気付いた。そういうわけで、彼らは大いなるいたずらの為に協定を結び、互いを標的にするのを控えることにしたのだった。

かなり年上であるコーネリアスにセシーリアは全く距離を感じないらしく、引け目を感じるどころか、寧ろ率先していたずらを考え出し、実行した。

庭師が用意した、完璧に並べられ、植え替えるのを待つだけだった花々の鉢をめちゃくちゃに並べ替えもしたし、メイド達が運んでいた洗濯前のカーテンと、選択後のカーテンの置き位置をこっそり入れ替えもした。洗い立てのカーペットに足跡を付けるのは勿論、来客のために並べられた皿に、砂で絵を描いたりもした。子どもだけでは絶対に行つてはいけなと言われていた、領地の北の境界にある森にも行つたし、同じく子どもだけでは絶対に乗つてはいけなと言われた大きな暴れ馬にも乗った。

擦り傷は嫌になるほど作ったが、幸いなことに大きな怪我もしなかった。散々怒られたりもしたが、二つの屋敷の人々にとって非常に残念なことに、二人は全くへこたれなかった。寧ろ、どんどんいたずらが巧妙になっていくという「成長」が見られる始末である。

フェザーランド卿が床に伏し、暗くなりがちだったフェザーランドの屋敷内は、暗い気持ちになる間もなく二人の悪魔に手を焼いていた。

一緒に遊べて、よく気が合う妹のような存在に、コーネリアスは浮き立っていた。彼女はコーネリアスの提案をすぐに理解する上に、更に「面白い」アイデアを、こんこんと湧き出す水源のように、もたらす少女だった。同じものを見ることができ存在、そして時には守るべき存在が出来たことを、彼は純粹に喜んでいた。

セシーリアが考えを巡らせるときの仕草や表情は、視線を逸らす

ことのできない何かがあるようだ、と幼い自分が不思議に穏やかな気持ちで考えていたことを、コーネリアスは今でも覚えている。あの大きな馬に二人で飛び乗ったときに、彼女の小さな手が、驚くほどの力で自分の体に回されていたことも覚えている。大人の目を盗んで馬に乗ることを提案したのはコーネリアスだったが、小さなセシーリアを危険に晒したことに気付いた瞬間、その提案を心から後悔したのだった。

思い出すと、面映ゆい。小さな彼は、まだその気持ちを何と呼ぶか知らなかったが、確かにその気持ちを知っていた。

二人の両親達は、子ども達が仲良くなっていくのを見ながら、更に将来について期待を膨らませたのだろうと今になって思う。後にレイチエルを加えた4人は、本当に喜んでいたと聞く。けれどそんなことを知らされていないセシーリアとコーネリアスは無邪気に、本当に無邪気に友情を育んでいた。

セシーリアと一番長く共に過ごしたあの夏は、コーネリアスの記憶に木漏れ日と野の風の匂いを残している。

あれだけ仲の良かったセシーリアと、思春期以降は、実は殆ど逢ってはいいない。

彼には寄宿学校があったし、大学にも行った。現在は卒業してしばらく経つが、その間ずっとロンドンに居り、長期休暇にも滅多に帰らなかった。

帰って来なくなかった、というのが一番正しいのかも知れない。それを知ってか知らずか、すっかり快復したフェザーランド卿は、屋敷に戻ると必ずシアリーズ公爵一家を招いた。何年かに一度、屋敷に帰ると、帰ってきた放蕩息子のように迎えられた。帰っても、セシーリアが居ないこともあったが、両親達は子ども達が手紙をやりとりしているのを何故か知っていて、将来を夢見ていたのだろう。

今ではロンドンの屋敷を拠点とし、父から引き継いだ仕事もロンドンでこなしていて、帰れない理由は山とあった。

セシーリアに逢うのが怖かった。

それが一番の理由だと、彼は自覚していた。

交わした手紙は、今や本棚の引き出しを二つも占めているが、彼が『そのこと』を自覚してからは、両手の指に収まるほどしか逢わなかった。コーネリアスが寄宿学校に入るまで、二人は毎日のように一緒にいた。寄宿学校に入ってから、最初の頃は長期休暇で帰省するたびに、それまでと同じように二人でいたずらを企て、喧嘩し、笑った。

けれど、自分の身に起こっていることに気付き始めたコーネリアス少年は極力、親しい人々を避けるようになった。大切に想う人達を……守るべき人達を。

今、ロンドンでのコーネリアスは、社交界で噂になるほど、浮き名を流している。彼はその必要にかられていた。数々の美女達と交際し、共に夜を過ごした。……コーネリアス自身は、相手を慎重に選んでいたにしても、彼と噂になった女性は数多い。噂の全てが真実ではなかったが、中には真実も含まれていた。

コーネリアスの穏やかな物腰と、不思議な存在感、それに自然と漂う色香は、無視するには魅力的すぎるのだろう、というのは寄宿学校時代からの親友の言葉である。親友であるネイサンによると、「女性の方が放っておかないタイプ」なのだそうだ。

……それなのに。

コーネリアスは苦い色を浮かべた視線を、幼いセシーリアの肖像画から引きはがし、遠く、肖像画が描かれた頃のセシーリアと探検に出かけた森の方へさまよわせた。

そう、彼は愛する家族と暮らすことは出来ない。

なぜなら彼が渴望しているのは、人の血液なのだから
……。

4 (後書き)

やっとファンタジー設定を引っ張り出してきました
第一章はここでおしまいです。次のお話は第二章になります。

僕は化け物だ ……。

初めて自分が渴望している物が何であったかを自覚したコーネリアスは、まずそう思った。セシーリアと仲良くなった頃から、何かに渴いている自覚があった。しかし、その頃はまだ何に対する飢えかに気付いていなかった。

ただ漠然と恐怖を感じた。

何故かは分からない。けれど確かに、それは恐怖だった。そしてその渴望は、歳を経る毎に次第に強くなっていった。

14歳になった頃には、同級生が憧れる対象 美しい女性を目にした時、喉の渴きとなって現れた。喉が渴き、水分が欲しくて仕方がない。口の中までがカラカラになって、声が出しにくくなる。けれど、カップの周囲に水滴がつくくらいの冷たい水を、一気に口に流し込んでも、まだ口の中は渴いていた。

これは何だ……？

何も知らなかったコーネリアスは、街で彼女らを目にするとき、喉が渴くのだと同級生の仲間たちに漏らしたことがある。

彼らは一笑に伏した。少年たちは不自然なくらい大人ぶった口調で言ったものだ。

「おいおい、バートランド。そんなに飢えてるなら、今度一緒にこっそり寮を抜け出すかい？」

「そういえば、エドガーがよく行く宿を教えてくださいんだ。……試してみるか？」

「一度行ってみても良いと思うね。計画を立てようじゃないか。」
エドガーは寮長である先輩で、とんでもないいたずらもよくしたし、冗談を言わずには3分も保たないような男だったが、家柄も成

績も申し分なく、加えて故郷には弟妹が何人もいて面倒見が良かった為、後輩達にはとても人気があった。

……本当に冗談好きなエドガーが言ったことは、何処までが本当のことか判断が付きかねることも多かったが、『誰にも内緒で』と『大人になる儀式』と称された計画に惹かれ、仲間たちは大袈裟に、冗談半分に、そんな事を言い合った。

そうか、この感覚は肉体的な欲望なんだ。みんな同じことを感じているんだ。

ほっとしてコーネリアスは「自分は正常だ」と、自分を納得させた。

その頃から『それ』を目で追うようになった。誰かが怪我をしたとき、溢れ出る『それ』をうっとり見つめている自分に気付き、啞然とした。

僕は何を考えているんだ？！

黒く、赤く、艶やかに光りながら、ゆっくりと肌を這っていく『それ』。

『それ』は、とても美しくて、そして……。

美味シソウダ。

自分がそう思った瞬間、背筋を冷たい手で驚つかみにされた気がした。

彼は無理矢理、自分の視線を『それ』から引きはがし、違う方へ思考を持って行こうとした。例えば美術室の裸婦画とか、明日提出しなければならぬ課題とか。裸婦画は思考が逸らされない上に同時に別の効果をもたらしたので、あまり役に立たなかったが、課題はいつもかなりの効果があった。

しかしその恍惚とした感覚は彼に例えようのない衝撃を残した。

それでも思い違いだと、自分はそんなものになど興味は無いのだと言い聞かせた。頭の何処かが納得していないのを感じながら。肉体的な欲望だと思おうとした。絶対に違うのだと。

16歳の誕生日を迎えて半年ほど経った春、いつか冗談の様に言い合った『計画』を仲間の誕生日に合わせて実行した。先輩から教えて貰った宿は、そう遠くもない場所にあった。学生の相手にも慣れているようで、長い歴史のある寄宿学校の学生だと、どこかで分かっているような応対だったように思う。夜中に寮に戻るときも、女主人は何も言わずに、寮に近い裏門から5人を送り出してくれた。同級生と寮を抜け出した次の朝、彼は授業に出なかった。

部屋まで様子を見に来てくれた4人の仲間たちは親しみを込めて、下品な言葉で彼をからかったが、コーネリアスはいつものように冗談を返すことが出来なかった。彼の青い顔を見て、それまでからかっていた仲間たちは、本気で彼の心配を始めた。

医務室に行つて薬をもらえとか、数日はそこで寝ていろとか。仲間の一人など、「誰でも初めは上手くいかないものさ」と、見当はずれの慰めの言葉をかけていった。

友人達の気遣いは嬉しかった。心から嬉しかった。しかし、彼の心は友人達には手の届かない疑惑と不安に満ちていた。

嘘だ。

だってこれは肉体的な欲望だった筈だろう……？

彼の渴望の半分は満足していた。コーネリアスに宛がわれた宿の女性は、どちらかというと上品だったように思う。エドガーに聞いていたような、あけすけな態度や物言いはしなかった。目の色は覚

えていないけれど、薄い金色の髪の女性だった。体つきは線が細く、まだ若いのだろうと思わせたが、未経験の少年を上手に導いてくれた。

その瞬間、体は確かに悦んでいたし、満足感を覚えた。しかし、まだ違う何かを欲している自分に、彼は恐怖を感じていた。そして欲している『それ』が何であるかを、心の何処かで既に発見していた。

白い肌に触れる自分の指が無意識に、皮膚に透ける青い線を追うことも、華奢な手の甲に口付けるとき、そのまま歯を立ててしまいたくなることも。

けれど認めるわけにはいかない。

女性を腕に抱いたとき、同時に別のものを欲したなんて嘘だ。僕は普通の人間だ、正常なんだ。そんなものに興味なんて無い。……そうだろうか？

しかしその日はやってきた。更に彼を追い詰めるべく、唐突に。

1 (後書き)

コーネリアスの寄宿学校時代が中心の章です。

妙なところもあるかと思いますが、この頃のことを描く上で参考にしているいくつかの本もフィクションなので大目に見てやって頂けると嬉しいです。 T T

それは、夕食後の談話室で、いつも一緒にいた仲間たちのうち、血気盛んな二人が口論を始めた日だった。

コーネリアスには仲の良い友人が4人いた。寄宿学校に入学して様々な友人ができたが、彼らには心から笑って話すことができた。よく喧嘩もし、殴り合いの喧嘩に発展したこともあった。

しかし、その日の喧嘩はいつもと違った展開を見せた。初めは言葉の応酬だったのが、いつの間にか口汚い罵り合いになり、立ち上がったの喧嘩になっていた。よくあることだが、それまで何について話していたのか思い出せないくらい些細なことが原因だった。

他の仲間たちと喧嘩の仲裁に入ったコーネリアスは、無我夢中で殴り合う友人を、こちらも無我夢中で押さえた。

思うように動けなくなった当事者の二人は、止めに入った仲間たちにも罵りの言葉を浴びせた。その刃は容赦なくコーネリアスにも向けられた。

「父親がお偉い公爵様だからってなバートランド……！」

伯爵家の跡取り息子、ナサニエル・ウェリングフォード 愛称
ネイサンは罵倒する言葉の合間にコーネリアスにそう言った。

その場は凍りついた。父親が爵位を持たないウィリアム・パターソンと、父親の肩書きが身分的には一番高いコーネリアスは、共に真っ先に顔の色を失った。5人の仲間全員が動きを止め、一瞬置いて我に返ったネイサンは、ウィリアムとコーネリアスよりも青い顔になった。

「すまない！……違うんだ、コーネリアス！頭に血がのぼって……」
しどろもどろながらも一生懸命、友は謝った。

「……僕の親友達は身分差別主義者なんかじゃ無いと思っていたよ……。」
ぼつりとコーネリアスは誰に言うともなく呟いた。しかし、その言葉は、先ほどコーネリアスに投げかけられた罵倒の言葉よりも深く、ネイサンを傷つけたらしい。

ネイサンは傷ついた表情を瞳に浮かべ、それでもコーネリアスに謝った。

「本当にすまない、コーネリアス……。頭に血がのぼって、まともにものを考えていなかったんだ。ただ君を傷つけようとしていたんだと思う。そんなこと、普段は全く考えていないよ。」

苦しそうに息を吸い、まだ凍りついている他の仲間たちにもネイサンは謝罪の目を向けた。

「……君がそんなことを鼻にかけるような人間じゃないのも解っている。僕は差別主義者じゃないつもりだ。」

コーネリアスは真っ直ぐにネイサンの瞳を見た。ネイサンの明るいブルーの瞳は誠実な光を宿し、仲間たちを傷つけた苦痛を浮かべて今にも泣き崩れそうに見えた。その美しい水色の瞳はセシーリアを思い出させた。コーネリアスはネイサンがどういう人間かを知っている。この学校で最初に隣の席に座った、静かな物腰の少年。ネイサンとコーネリアスは、最初に友人になり、一番の親友だと思っている。それだけに彼の安易な台詞はコーネリアスを傷つけた。

コーネリアスたちがこの学校に入学してから、先輩の少年たちは身分による縦社会がどういうものかを彼らに教えた。エドガーのように気に入った後輩達を護ろうとする者も中にはいたが、大半は貴族特有の差別的な態度を自慢にしていた。そしてそれは、同級生同士でも存在する意識だった。

爵位を持たない家庭からやってきた少年たちは、特に酷い嫌がらせを受けていた。ウィリアム・パターソンもその一人だった。大半が爵位を持つ家庭出身の少年たちで占められる中、ウィリアムがい

くら彼らより良い成績を収め、教師達の信頼が厚くても、それだけに彼は他の少年たちよりも酷い扱いを受けた。

コーネリアスはウィリアムが好きだった。色素の薄い胡桃色の髪を持つ、大きな深緑色の瞳の、努力を苦とせず優しく微笑む少年がウィリアムと自然に仲良くなったコーネリアスは、やはりウィリアムと親しくなっていくネイサンが自分と同じような考えであることを知っていた。

コーネリアスは、ここに来て間もなくから、父親が公爵であるというだけで正反対の、2種類の対応を受けていた。一つは仲間意識自分たちと同じ『高貴な』出身だという扱い。もう一つはそれとは逆の意識。ネイサンが言ったような『お偉い公爵様』という扱いだ。コーネリアスが何を言っても、何をしても、それらの扱いは変わらなかった。

最初の頃は訳が解らなかった。自分が何故2種類の扱いを受け、自分が何をしても同じ反応しか返ってこないのかが。現在、行動を共にしている仲間たちは、入学してから、かなり経ってから出来た仲間である。

彼らと仲良くなるまで、コーネリアスがすることに、反対したり賛成したり、コーネリアスが知っている親しみを込めた反応を返してくれるのはネイサンだけだった。

コーネリアスは人の心の動きに敏感な少年であり、それ故に早くから孤独を感じていた。同級生たちは自分を、父の跡継ぎとしてしか見ない。ネイサンが出身に関わらず自分を好いてくれているという事実は、寒々としていたコーネリアスの心に、一条の光をもたらした。

同級生達が言うところのパターン「なんか」と仲良くなったコーネリアスは、2種類のどちらからも微妙な距離を取られるようになった。良く言えば、お互いに心地良い距離を取れるようになったということかも知れない。悪く言えば、表面上は仲良くできるが、それ以上は踏み込まない関係ということだろう。正直に言えば、そ

うしてくれる方が楽だった。

ネイサンやウィリアムと一緒にいるうちに、各々が気付いていなかった様々な心の動きを、お互いに気付くことの出来る仲になっていった。勿論そこまで仲良くなるには相当の時間を要したが。

だからこそ、ネイサンは自分の言葉がコーネリアスとウィリアムをどれだけ傷つけたかを悟っていた。ネイサンは真摯な眼差しで熱心にコーネリアスに謝罪の言葉を向けた。同時にそれはウィリアムに向けた言葉でもあった。だが、コーネリアスもネイサンも、謝罪の言葉を向けるのも、許しの言葉を向けるのも、お互いだけに留めていた。それらをウィリアムに向けるのは、それ自身が彼を傷つけるであろう事を知っていたから。無邪気な悪事を3人は既に体験していたのだった。

ネイサンを許すとコーネリアスが言ったのは、彼も自分の言葉に驚いていたことに気付いていたからであり、きっと部屋で一人になってから、ネイサンが独りで思い悩み、自分を責めるであろう事を、彼がそういう性格であることを知っていたからだった。

いくら頭に血がのぼろうと、彼が口にした以上、心の何処かにそうついた意識が潜んでいる筈だ、とネイサン自身も思っていることに気付いていたから。

僕が知っているネイサンならば、彼は既に自分自身を責めている。これが如何に僕たちを傷つける出来事かを、ネイサンは知っている。きつと今夜遅くには、僕たちの信頼を裏切ったと思うことだろう……。

2 (後書き)

あと1話で第二章が終了です。

暫くして、仲間たちはいつものように、互いに肩を叩き合い、穏やかな表情で別れた。部屋が他の仲間たちより近くにあるウィリアムと、ゆっくり歩き出しながら、ウィリアムの瞳の中に傷ついた表情がないか、探していたコーネリアスは、ウィリアムもコーネリアスの瞳に同じような感情を探していることに気付いた。

二人は、改めてお互いを気遣っている自分に気付き、また友情が深まったことに気付いた。お互いの行動に照れながらも、更に二人共がネイサンを心配しているのを確認した。

「ネイサンが心配？」

二人で歩く暗い廊下で、いつものように穏やかにウィリアムが尋ねた。

「心配だよ。きっと僕以上にショックを受けていると思うから。」

「僕らが知ってるネイサンなら、必要以上にショックを受けているだろうね。」

ウィリアムは微笑みさえした。

「……僕は君たちが大好きさ。いつか詳しく話すよ、大人になったらね。あの時、本当は家に帰ろうと思っていたんだ。僕はここが場違いな場所だと感じていたから。」

『あの時』というのはきっと、コーネリアスが初めてウィリアムに声をかけた時の事だろう。ウィリアムは続けた。

「君が僕に近付いてきたのは、皆と一緒にになって僕を馬鹿にする為だろうとさえ思ったよ。」

少し考えた後、コーネリアスは応えた。

「実は、君にそう思われてるだろうなって思ってたよ。」

コーネリアスの言葉にウィリアムは驚いたようだった。

「コーネリアス、不快じゃなかったかい？」

「いや、僕も君と別の意味で同じような扱いを受けていたから、当然だと思った。……多少は心外だったけど。」

柔らかく笑ってコーネリアスはウィリアムに言った。ウィリアムも笑った。

「公爵家の君は、伯爵家のネイサンとずっと一緒だったからね。上流階級同士で居たい部類の人なんだと思っていただんだ。」

「誤解の無いように告白するけど、僕は君を君として好きだよ。大切な友達だとね。」

「解ってるよ。僕も君が君だから親友だと思ってる。」

「……ネイサンもね。」

「勿論。……彼はきつと今夜、自分を責め続けるだろうね。」

「だろうね。ジョージとサムも心の中では心配していると思うよ。」

今日、ネイサンと喧嘩をしたのはジョージだった。ジョージ・ヘンドリックはトビアス子爵家の三男である。彼には兄が二人と姉が一人、加えて妹が二人いる。兄弟が多いので、面倒見は良いのだが、激しやすい性格であることが災いすることが、よくあった。

もう一人の仲間、サミュエル・バーネットは、サムと呼ばれている。彼はジョージの母方の親戚にあたるらしい。バーネット子爵家の次男である。兄と弟・妹が、それぞれ一人ずついる。彼は陽気で、いたずらには率先して参加する性格の少年だったが、いつも抜け目なく、彼が参加したいたずらは絶対に犯人が誰か、ばれることが無かった。

「ネイサンは本当に良い友人を持ったと思わない？」

「いたずらっぽく微笑んで、ウィリアムは言った。」

「全くだよ。本人が気付いてくれていると良いんだけどね。」

二人は笑い合いながら、ウィリアムの部屋の前で別れた。

晴れやかな気持ちに満たされたコーネリアスは、いつも自分の心に重く沈んでいる悩みをすっかり忘れ去っていた。

寄宿舎のベッドの上で一人になったとき、彼は掌が出血していることに気付いた。

ジョージのカフスポタンだ。ジョージは面倒見が良いのに、自分の面倒はあまり見ない。欠けているのに、全然気にしていないんだから。きつと止めに入ったときに擦ったんだな。……全く困った奴だ。

彼は腕にも打撲傷があるのに気付いた。名誉の負傷だ、と温かく微笑みながら、他にもないかと腕をまくって痛みを探す。

あつたとしても、大したことは無いな、きつと……。

何の疑いもなく、幼い頃から変わらない仕草で、傷口を口元に持って行つた。

気付いたときには遅かつた。

自分の唇に掌を押しつけたまま凍りつく。

『それ』を『美味』だと感じた瞬間、彼は理解した。

僕はこれに渴いていたんだ……。

継いで心が叫んだ。お前は化け物なんだ、と。

僕は化け物だ……。

彼の世界に、足元から、蜘蛛の巣のような亀裂が走つた。そのままゆっくりと崩れていくのを、コーネリアスは呆然と感じていた。今まで脚を乗せていた世界が、ガラスのようにバラバラに割れていく。

肉体的な欲望と同時に存在する、もう一つの渴望。同級生が夢想到に誘い込む様な美しい女性を見て感じる、他の同級生と同じ欲望と、全く違つた渴き。彼女らの肉体を見て欲望の中に浮かぶ、もう一つの対象。白い肌に透ける青い筋を見てこみあげる欲求……。脈打つ

首筋を見て無性に欲しくなるもの……。

瞳を閉じ、暗闇を見つめる。崩れてしまった自分の世界が、破片になってゆっくりと舞い上がり、音も無く自分の身体を突き刺していく。胸が血を流している、と彼は思った。いや、違うな。誰かが僕の中で、外に出せと内側から胸を叩いているんだ。

どれほどの間、そうして痛みを眺めていたのかは解らない。ふと瞳を開き、見慣れた天井を眺める。

震える唇から話した掌の傷口は、跡形もなく消えていた。

「僕は傷を消す能力で一儲け出来そうだぞ。」

普段持て余しているユーモアが頭をもたげて彼は一人そう呟いた。

……直後に目尻から涙が伝っていった。温かい滴は漆黒の髪に吸い込まれていく。

傷の無くなった掌をそのまま顔に押しつける。そのまま、いつかセシーリアがしていたように、声を殺し、肩を震わせて、涙を堪えた。眉間が盛り上がり、瞼が震える。噛み締めた顎の痛みにも気付かなかった。堪えた筈の涙は次から次へとこめかみを伝って流れていく。

何でなんだ……。今まで何ともなかったじゃないか……。！ 何で気付いたりしたんだ……。！

そう思いながらも自分では気付いていた。多分、最初から。

痛む瞼の裏側に、まだ自分に向かって降りかかってくる破片が、きらきら光っているのが見えた。

その次の朝、彼はやはり授業には出られなかった。

3 (後書き)

いろいろカットして、やっと3000文字以内に収まりましたT T
いつか番外編を書くことがあったら、5人が一緒のお話をもう少し
書きたいなあと思います。

第二章はこれで終了です。今日の更新もここまでにします。

「コーネリアス坊ちゃん！」

コーネリアスは、一気に現在へ引き戻された。ドアに目をやると乳母が立っている。

「やあ、ポリー。ただいま。」

微笑んで立ち上がる。コーネリアス本人は全く気付いていないが、その微笑みは、洗練された貴婦人の集まるロンドンにおいても、彼女達に溜息をつかせるのに十分な魅力を備えていた。

「お帰りなさいませ。……お元気そうで。」

乳母は喜びの涙を光らせながら微笑んだ。

ここ数年は、帰ってくる度にこんな調子だ。こちら屋敷の方がロンドンに近く、彼が帰ってくる頻度が高いことに加えて、ポリーの夫・ザックがこの屋敷の庭師である為、公爵夫妻が別の屋敷に移った時も、ポリーは彼らに付いて行かずに屋敷に残ったのだった。コーネリアスの父・シアリーズ公爵は、仕事をコーネリアスに譲って隠居を決め込み、妻レイチエルと季候の良い別の領地の屋敷にいる。乳母の赤毛は前に見たときよりも色褪せてきたようだが、まだまだ若々しく、動作も力強かった。迷いのない動きで、乳母に歩み寄り、抱擁を交わす。コーネリアスの育ての母は実質、このメアリー・クラーク。愛称ポリーだった。優しく抱きしめて頬にキスをする。

「ポリー、また太った？」

穏やかに問いかける。

「まあ！それが女性に対する台詞ですか！」

快活に笑ってポリーが言う。

「これでロンドンの色男なんて言われるのだから不思議ですわね。……全く、うちの坊ちゃんは。」

まだ笑いながら、少し誇らしげに言われ、コーネリアスも笑った。「どこから仕入れてくるんだい？ロンドンでの僕の評価なんて。」

「何とでもなりますよ。」

自分は万能の神だと宣言するようにポリーが言う。

「ザックはどうしてる?」

「元気にしてますわ。もうすぐご挨拶に来るでしょう。」

「ギルやジェシカにはさつき会ったけれど、他の皆は変わりなく過ごしているかい?」

ギルはこの屋敷の料理長、ジェシカはまだ若いメイドである。ジェシカはギルの末の娘で、コーネリアスも彼女が生まれた頃からよく知っていた。

自分の故郷で、懐かしい人達に温かく迎えられる。これほど幸せな事が他にあるだろうか。いいや、ないさ、とコーネリアスは言い聞かせるように自答した。

ポリーの親愛の情に満ちた近況報告を聞きながら、紅茶のカップを口に運んだ。

ふとまた壁にかかった絵が目に入る。4人の仲間たちがここに遊びに来た時に描いて貰った絵があった。

コーネリアスの父、シアリーズ公爵には高名な画家の友人が居る。何年かに一度、その画家はこの屋敷を訪れ、シアリーズ公爵との旧交を温めるのだ。その滞在の折りに、大きな肖像画を依頼されて描くこともあったが、多くの場合は今、コーネリアスが見つけているような小さなスケッチのような作品を描いていた。描かれている人々がポーズを取っているものもあれば、日常の何気ない動作を描いたものもあった。コーネリアスの居間の壁は、一部がこの小さな絵で埋まっている。

コーネリアスが今、見ている絵の中の5人は、17歳くらいだろうか。コーネリアスと、ネイサン、ウィリアム、ジョージ、サムが描かれていた。一様に弾けるような笑みを浮かべ、庭で球技に勤しんでいる。この絵は画家のスケッチで、どの少年もこちらを見てはいない。今にも囁きたてる声や、大きな笑い声が聞こえてきそうな

絵だ。

あどけない笑顔の中に、どこか影を落とすコーネリアスの表情を、画家は的確に捉えていた。まだ決定的な事実には気付いていなかった頃だろうけれど、大人になった自分が見るその表情は、やはりどこか苦悩の影が見えた。

この絵が描かれた夏、セシリアは家にいて、コーネリアスの友人たちに会いたがった。あの夏のこととは煌めくような大切な思い出だが、自分がセシリアを友人たちから引き離しておこうとして必死だった部分は、あまりに照れくさくて思い出したくない。

なんだか胃の辺りがざわめき、肩を竦めたくなるような気持ちに襲われ、コーネリアスは隣の絵に視線を移した。そこには19歳くらいの3人の青年が微笑む肖像画が飾られていた。

この家の居間にあるソファの左にネイサン、右にウィリアムが腰掛け、その後ろにコーネリアスが立っている。画家の秀作として、3人がモデルを務めた肖像画である。

ネイサンはどこか緊張した面持ちで、照れくさそうに微笑んでいる。今のネイサンと比べると、やはり「少年」といった印象を受けた。今よりも線が細く、そして……

影がない。

コーネリアスは、ぼんやりとそんなことを思った。

ネイサンの右に座すウィリアムは今にも喋りだしそうな瑞々しい表情で、穏やかに微笑み、こちらに目を向けていた。深緑色のウィリアムの瞳は、そこに反射する光が揺れているようにさえ見える。

懐かしい友の、穏やかな笑顔を眺めながら、彼の意識はまた記憶の川を辿り始めた。

それは、コーネリアスが20歳の早春のことだった。コーネリアスとネイサン、ウィリアムはオックスフォードの学生になっていた。ジョージとサムは実家近くの方の大学に進学しており、その頃には手紙のやりとりはあるものの、会う機会は少なくなっていた。

ある日、父に呼び戻されてコーネリアスは故郷に戻った。内心では解っていた。父はまた結婚を促そうとしているのだろう……。きつとセシリアとの婚約、その確約が欲しいに違いない。とはいえ、セシリアはまだ15歳だ。いや、『まだ』とは言えないか……。

コーネリアスは複雑な気持ちを抱きつつ、故郷に出発した。ネイサンとウィリアムは、コーネリアスの今回の旅行が気の進まない帰郷であることが、見通せているようだった。二人はいくらか苦い微笑みを向けてコーネリアスを見送った。

「道中、気をつけるよ、コーネリアス。」

ウィリアムが言った。いつもの穏やかな微笑みを浮かべて。

「お父上が何を言っても、逃げおおせることを祈ってるよ。」

ネイサンが笑いながらからかう。

「一週間で帰るから、帰ってきたら報告するよ。」

冗談を返しながらコーネリアスは出発した。いつもと何ら変わりはない。10年近く一緒に居る親友との、何度となく交わした、ありふれた光景。

コーネリアスは何の疑いもなく、一週間後には三人でまたとるに足りない会話を楽しめると思っていた。

……彼は、全く疑っていなかった。

1 (後書き)

セシリアが出てきません……T T

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7554x/>

僕が望む全て

2011年10月30日05時09分発行